

成人学級で「万葉集」を取り扱って

石 田 民 生

はじめに

昭和五四（一九七九）年五月から九月まで十回、月のうち第二・第三土曜日の午後ほぼ二時間ほど、広島市の西にある草津公民館で、成人学級の活動の一つとして「万葉の世界」の講座を担当した。その概略をのべ、おとなの方々の「万葉集」受容の一面を紹介したい。本年度も六月から十月まで十回担当することになって、ため、昨年度をまとめて今年度の指導の手がかりを得たいと思つて、いるところである。

講座担当者になつたいきさつは①私が庚午に住んでいるので公民館との連絡が便利であること②昭和三十九年から十三年間、元女学院大学教授の加藤惣一先生のグループで、読書会を月一回持ち、二十巻・四千五百余首を読んだ経験があることで、直接には前任で漢詩講座担当の小松英生先生（徳山工専教授）が推薦されたことによるらしかつた。

受講の方は二十五名の定員で、年輩の方が多い。定年退職されたという男の方も五人、夫婦で来られる人、おばあさんとその娘さんといった組の顔ぶれもあり、特に第一回は高校生と違い、ずらりと並んだ方々が偉く見えて、汗びっしょりになってお話した結果にな

つた。

講義の実際

1 ねらいのむずかしさ

公民館側の依頼は、短歌の読解や鑑賞にとどまらず、万葉の時代や人々の生活、できれば現代との比較など、中広くしかもおもしろくやってほしいということだった。「おもしろくやっていたかない」と人が来なくなります」という注文は、頭にこたえた。万葉集はたしかに「無条件に楽しめる古典」であるが、お年寄りまで含めた一般の方々にそうおもしろく指導できるわけがない。大衆性を重んずれば、文芸性や芸術性は薄められるだろう。この調和をどう保つていくか、そこにねらいのむずかしさもあり、やりがいもあった。

2 計画

テキストに斎藤茂吉著「万葉秀歌上巻」を選び、その中から順に六、七首、できれば十首ぐらいをやりたいと思ひ、計画をプリントにして知らせた。

一回目は巻一の額田王の歌を中心にして読んでいき、さらに歌の鑑賞から発展して「月」について考えてみたいということを言った。以下、ほぼ次のようになる。（しかし、実際にはこの通りには

進まなかった。)

二回 柿本人麿の歌を中心に、「神」について考えてみる。

三回 巻二にある大津皇子・大伯女皇の歌を中心に「兄弟愛・肉親の愛」について考える。

四回 やはり巻二、柿本人麿の歌を読みながら「死」について考えてみる。

五回 巻三の歌を読みながら「旅」について考えてみる。

六回 同じ巻の大伴旅人の歌を読みながら「酒」について考えてみる。

七回 巻四の歌を読みながら「万葉がな」について理解をしていく。

八回 巻五、山上憶良の歌を読みながら「人生や家庭」について考えてみる。

九回 巻六、山部赤人の歌を読みながら「自然と人間」について考える。

十回 巻七の歌を読んでいく。まとめとして「万葉時代に生きた人々」について考えてみる。

という計画で、万葉集の歌を正しく読み味わうことを目的にし、一方ではこれを発展させて当時の生活も含めて中広く理解していくこともめざした。

3 時代の説明

ふつう高校生に教えるように、萌芽時代、第一期、第二期と学問的に言うより、もっと現代のわれわれに即した話から入っていかなければならぬ。そこで「六〇四年は、一万円札の聖徳太子があるでしょう、その太子が十七条の憲法を定められた年ということにな

っています。」と一万円も持っていないのに言う。「法隆寺、あの本堂や五重塔などで有名な法隆寺の建立もこのころですよ」とつけ加える。そして凡そ、時代や作風によって、万葉の時代を四期に分けて、年代と作者を説明する。ちょうどその年の冬には太安麿の墓が発見されたこともあって「あの方の書いたといわれる『古事記』は七二二年に当り、万葉集の時代で言うと第三期になります。その頃、大伴旅人とか山上憶良とかいう歌人が活躍しました。万葉集最後の歌は七五九年とされ、この七年前に東大寺の大仏開眼がありました。つまり万葉集の歌は法隆寺のできたころから、奈良の大仏様ができたところまでの百五十年間で、それより古い歌もあるということですね。」と要項のプリントに合わせて、このような説明を加えた。

4 短歌鑑賞の大すじ

毎回鑑賞の方法は少しずつ変えていったが、大すじは次のようなやり方であった。

①それぞれの歌を、くり返して朗読する。

②「万葉秀歌」の歌を口語訳を中心にしながら通釈する。

③万葉仮名の使い方を説明し、漢字のまま読む。

④解説文を読み、茂吉の考え方に対する説明を加える。場合によっては解説文の解説をやりながら、自分の経験なども述べる。

⑤発展した話をしたり質問に答えたりする。

毎回、資料として西洋紙一枚のプリントを用意した。それは、その回に扱うべき短歌十首を「秀歌」掲載のページも入れて上段に並べ、下段には「万葉仮名」をも併せ記載したものである。

以下①から⑤までの内容に関して、気づきや印象に残る断片を例をもつてあげてみよう。

①朗読の場合、七五七五の調子に流されやすい。句切れや息つぎの個所を明示する必要が多かった。例「春過ぎて夏来るらし／白妙の衣ほしたり／天の香具山」(巻一・二八P31)

②は、皆さんの希望が多く、第三回より資料にプリントしたが、たいへん興味深く読んでいただいた。判じものを読み解くようなおもしろみがあり、慣れれば比較的すらすら読めるからでもあろう。関連することだが「271 桜田部鶴鳴渡」と「297 大王之命恐夜見鶴鳴」を読んだ時、「なぜ『つる』と読んだり『たづ』と読んだりするのですか。」という単純な質問に答えられなかったことを思い出します。「歌の材料になる時に『たづ』と言うのです」というのでは答えとして納得させられないのであった。

④に関して、額田王の歌「熱田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は榜ぎ出でな」の解説、『月待てば』はただ月の出るのを待てばとする説もあるが、月と潮汐とは関係があって、日本近海では大体月が東天に上るころ潮が満始るから、この歌で月を待つというのには「満潮を待つ」ということになる(万葉秀歌上9ページ)この一文に関する説明。「私も時々釣りに行きますが夜釣りは月が出るまでがよく釣れますね(笑) ちょうど潮が満ちる時で……。」「ゆうべは月がよかったのでわざわざ放水路まで潮ぐあいを見に行きました月がななめ上にあり、満潮のようでしたよ」(笑)と、このところは茂吉の解説を正當づける。

⑤に関して。

古代から「月」がどんな形で鑑賞されてきたか。「万葉の世界」からはいちじるしく脱線するが、かなりおもしろがって聞かれたように思われた。「月の顔を見るは忌むなること」という竹取物語の時代。月を池に浮かべて眺める古今和歌集の人々。木の間の月や、きらめいた葉にうつる月を見る兼好。月を友とする西行。「月天心貧しき町を」通る蕪村。それに「来年の月を曇らせてみせる」金色夜叉の貫一など、時代により月の鑑賞のしかたも変化していることを話し、現在はどうなのであろうか、考えてみる必要があるだろうと言つて結びにかえた。

5 その他

単調さや情性を避けるため、毎回、教育の問題の話をしたり、暑い時には短歌の朗誦の指導をして暑さをまぎらわしたり、できるだけ多くの本を紹介したりした。梅原猛氏の「鴨山説」の話を人暦の歌に続いてやり、「水底の歌」の内容を紹介したことがあったが、たいへんな努力をしたわりには受講のかたの関心は薄かった。

受講の方々の反応

「講座が十回もあって、二十五名のうちで十五名も続けて来られたのだからよかったですよ。ふつうなら半分以下になりますからねえ。」「そうですね。いろいろおもしろかったし、先生がカバンにいっぱい風呂敷にまで本を持って来られて、わたしらに見せてくださるんだから。」

こういうことばが聞けたのは、やっと十回が終って、公民館の厚意でみんなと茶話会を開いた時のことであった。

も挑戦せねばならない。(一九八〇年五月)

(広島県立安西高等学校教諭)

その他、主な感想を列挙すれば、次のようであった。

・万葉集というものがあることは知っていたが、この年になって実際に読んでみて、すばらしいものだと言わかった。

・万葉集の歌にめぐり合っただけでよかった。

・万葉集に関するいろいろな本を紹介してもらってよかった。「額田王」や「万葉の旅」など読んでみると楽しい。

・古代人はわたしたちの持っていないようなすばらしいものを持っている。現代の人は得たものも多いが失っているものも多いのではないだろうか。

・万葉仮名で読んでいくのはたいへんおもしろい。

・「上代特殊がな」は学問的なものだそう、ふつうなら読んでもわからないのに、説明を聞いてなるほどと思う。少しはわかったよな気がする。

・なぜ万葉集が今まで残っているのだろうか。万葉集のもととはどんなものだったのだろうか。

・なぜ長歌が亡びて短歌が多くなったのだろうか。

・なぜ五七五七七の歌の形になるのだろうか。

終りに

日々多忙な学校生活の中で、いつも気がかりになっていた「万葉の世界」の講座であり、一回一回をどう展開し、どう脱線しようかと、気の重いことであった。一時は「万葉秀歌」などテキストに選ばなければよかったと思っただけであった。古典を一般の中に広げ、鑑賞力を高めることはいつも至難なわざである。しかし、今年